

「何や、心細い酒やなア。にわさめ云ふのは良えか。」

「此の庭から出たら醒めるね。」

「ぢきさめわいな。」

「飲んで仕舞ふたらぢきに醒める。」

「其様なんどもならんナ。どうで酒の中へ仰山水混ぜてるのんやろ。」

「いや。水の中へ酒を混ぜるのや。」

「ウワー。水臭い酒やろナ。」

「いゝや、酒臭い水や。」

「どこまで逆意やがね。何でも宜えワ。一番佳えのん持つて来い。」

さア二人が献しつ献さゝれつ飲んでる裡に、佳え氣嫌になつて来ました。(未完)

◎名洒落 或る大紋目。朝から雨がシト／＼降て居るので外へ遊びに出る事が出来ぬ、こりや席は大入疑ひなしと喜んで居る内にカラツと晴れて仕舞た、連中樂屋で口々にこぼして居ると柱にもたれて居眠つて居た三代目松鶴の竹山人。小聲に唄ふて曰く「止んだら愚痴だえ」



苺の火

笑福亭 松鶴

朝賀 大鱗 畫

エ、此度は苺の火と云ふお哢を一席申上ます。

上方落語の中でも極く皮肉な物で、誠にお作は佳う出来て御座りますが、お笑ひに乏しい様に心得ますので、まア精々顎髭に力を入れて御機嫌を伺ふ事にいたします、現今は住吉街道もすつと家が並びまして、殊に西へ新道路の廣いのが出来ましてから、あんまり自動車やトラックが通らん様になりましたので、夜分など散歩がてらの人達で、豪ふ賑やかになりましたが、往昔は住吉さんの前と、天下茶屋とにバラ／＼と家があつた他、すつと田圃ばかりで夜などは無論人通りは御座りません。晝でも卯の日とか初辰とか云ふ時には大阪から住吉詣りをする人が随分通りますが、平日は紀州泉州から野菜や果物を積んだ車が通る位の物で、駕屋なんぞも、極く閑散な物やつた相で、住吉の鳥居前で